



最後の佐賀藩主・鍋島直大と 共にあった百武兼行

～祖父・父は皿山代官～



「母と子」
1878年 112×85cm
油彩・カンヴァス
有田工業高等学校所蔵

最後の皿山代官であった百武兼貞（作十・作右衛門）の子に百武兼行という人がいます。彼は天保13年（1842）6月7日に、佐賀藩士であった父百武兼貞、母ミカの次男として、現在の佐賀市片田江に生まれています。

父兼貞は慶応3年（1867）に、京都留守居から皿山代官に転任し、明治2年（1869）に藩政改革が行われた際、皿山代官所は皿山郡役所となり皿山郡令となりました。つまり、兼貞は最後の皿山代官であり、最初で最後の皿山郡令でもありました。この混乱期にあって、ドイツ人化学者のワグネルを招聘したり、また京都や東京の陶工や画家などを招いて新しい技術の導入を図っています。

しかしながら同4年（1871）には廃藩置県が実施されて、それに伴い皿山郡役所も廃止され、兼貞は罷免されて佐賀へ戻っていきました。同じ年の11月、兼行は政府の欧米視察団岩倉全権大使一行に同行した鍋島直大の随員として横浜港を出発しました。アメリカに到着後は使節団一行と別れ、ロンドンへ渡って直大とともに文学や経済学を学びました。

同6年（1873）にはウィーンで開催中の万国博覧会を見学し、渡欧中の佐野常民らと再会しています。同7年（1874）には佐賀の乱の知らせを受けて一時帰国しましたが、直大の再渡欧に随行しロンドンに滞在しました。このころから直大夫人の胤子の相手役として風景画家リチャードソンについて油絵を学んでいます。その後、パリ、ロンドンを行き来する中で油絵研究を続け、同11年（1878）に「母と子」を描いています。当時の兼行の絵は風景画が多く、人物画は珍

しいといわれています。この絵が現在、有田工業高等学校に所蔵されていますが、所蔵に至る経緯はローマ滞在中に父兼貞に送った

手紙に「皿山美術学校（勉脩学舎のことか）」に触れており、『有工百年史』を編纂された金岩昭夫氏は、この関わりがあったので「母と子」の絵画が有田工業高校の前身となる学校に寄贈されたのではないかと推測されています。

この年、パリで万国博覧会が開催され、直大とともに、日本から来た松方正義や前田正名らと会い、日本の内情などを耳にしています。

また、この万国博覧会場には直大夫人らが日本人形を作って出品し好評を博したといわれ、またパリ近郊のセーブル陶磁製造所を見学した折には、色鍋島の香炉一對を贈ったといわれています。

その後、兼行は明治17年（1884）12月21日、父に先立って死去しました。その生涯のほとんどは旧藩主鍋島直大とともにあり、海外での生活も長く、その間に洋画家としての腕も磨かれていったものと思われます。

実は、兼行の祖父であり、兼貞の父は成松萬兵衛で、彼もまた有田の歴史に名をのこす皿山代官でした。任務を終えて佐賀に戻る際には、皿山の人々がその徳を慕って、八幡宮（現在の陶山神社）裏手の登山道に「成松社」という石碑を建てています。

幕末から明治にわたって親子孫三代、有田に深く関わった人々です。
（尾崎 葉子）

皿 季刊 山

No.119

秋
2018

有田町歴史民俗資料館・館報

幕末・維新に活躍した 有田の先人たち 其七

家を守り、有田のリーダーたちを
支え育てた女性

深川セイ

(天保7年7月11日～明治43年3月9日)



せい子刀自壽像(深川巖家所蔵)

座像の裏銘

刀自本姓ハ辻氏、喜平次君
ノ女ナリ、深川栄左衛門真忠君ニ
嫁子二男四女ヲ生ム
明治三十九年、齡
七十、健全ニシテ
佛ヲ念ス
明治三十九年五月
十三日、記シテ以テ
深川忠次君ノ需ニ応ス
半月居士印

江戸時代から続
く上幸平の窯元・
辻喜平次の長女に
生まれ、成長の後
には八代深川栄左
衛門に嫁いだ深川
セイ。結婚後は家
庭を守り、家業を
支えながら子ども
たちを育てまし
た。

有田焼400年の
歴史は、このよう
な女性たちの存在
があつてこそその歴
史でもあつたと思
います。
(文中敬称略)。

【生い立ち】

歴史の中で、女性の活躍が残ることはまれで、名前すら残らないことが多々あります。例えば、『皿山代官旧記覚書』という江戸時代の公文書には、病気の夫を支えて賃仕事をして家計を支えている楠久津のきちさんに褒美を与えた記事など、あることはあるのですが、一般的には稗古場山喜八女房とか、茂兵衛母など名前が出てこない場合が多いようです。

しかしながら、世の中の半分は女性であることは今も昔も変わらないことで、有田陶磁美術館所蔵の「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」にみられるように、焼き物の仕事の多くに、女性の力が必要とされたことは言うまでもありません。

そのような時代に生まれた女性の一人が深川セイでした。実家は江戸時代から禁裏御用の窯元として名高い辻家で、成長後は本幸平の窯焼きである深川家に嫁ぎました。青年期にどのような暮らしをしていたかは

よくわかりませんが、名窯元の娘としての嗜みを身につけていたと思います。

【妻として、母として】

結婚後は後に九代目を継いだ栄左衛門(幼名与太郎)、忠次兄弟やとく、けい姉妹の母親として子育てにも活躍します。その姉妹が母親の三回忌を前に、明治45年(1912)3月に「みのりのかほり」という冊子を作り、有縁の人々に届けています。

これは母セイが文庫に残していた手帳があり、その中にはそれまで出会った人々との交流、浄土真宗に深く帰依していた母が書き残した言葉などがありました。例えば、「無量壽」という項目では60歳という壽の仲間入りをして「日夜後世の無量壽を得ることを楽しみて日暮しをして居ります(中略)大隈伯爵さんは百二十五歳まで生きるとおっしゃりますが、これもご自身の勝手算用であてにはなりません」という話を紹介したり、「今日一日の慎み」として三つ(君、父、師)の御恩をわすれず、不足をいうまじき事、今日一日虚言をいわず、無理なることをすまじ事、今日一日の存命をよろこび、家業の大切につとむべき事など、子どもたちへ生きる指針を記しています。このほかにも育児七ヶ条や良人の選び方など、時代を反映した内容もあります。

また、明治24年(1891)には娘を連れて浄土真宗の本山に参詣し、香蘭社製の焼き物をいろいろ献上していますが、その際には、法主様に拝謁し法話を聴聞したとあります。深川家は先祖代々、日蓮宗の門徒でありながら、浄土真宗にも深く帰依されていました。

また、「お宿の記」として明治20年(1887)の大晦日には有栖川宮熾仁親王が深川家を訪れて宿泊していますが、年末の混雑の中にあつてももてなしをし、翌日の元旦に「琴酒相壽」の書をいただいたことが記されています。

また、明治28年(1895)8月には村雲尼(瑞龍寺宮)が立ち寄られ、家族で心を尽くしてもてなしています。このときは激しい風雨で数日滞在されたので娘たちが琴や三味線の合奏をしたり、菅野の別荘に招いてお茶会を開いたりしています。

セイの写真はこの冊子に掲載されていますが、次男の忠次が明治39年(1906)に母の古稀を祝って、寺内信一に制作を依頼した陶像が残されています。いずれも晩年のセイの姿ですが、幕末から明治の混乱期にあつて、有田焼の存続をかけ日夜努力をしていた夫や息子たちを支えた女性の一人です。

【参考資料】「香蘭社130年史」 香蘭社社史編纂委員会編
「みのりのかほり」 小野島とく子・福田けい子編
「近代日本彫刻集成」 田中修二編

インターンシップを受け入れました

7月30日から8月1日の3日間、有田工業高等学校2年生の柴田陽春君と山本兼路君の2名が、インターンシップにやってきました。体験はいきなり資料館の掃除からはじまりましたが、初日から最後まで、元気の良い挨拶と真摯な態度で作業していました。今回の内容は、まず有田町歴史民俗資料館と出土文化財管理センターを案内し、ここでどのような仕事をしているのか、何があるのか、といったことを説明しました。それから3日間にわたり、出土遺物の洗浄や注記といった作業や、美術品を運搬するのに必要な梱包材の製作、8月20日、21日に行った模型教室の準備作業の補助などをして貰いました。また、有田町内の文化財を知ってもらうため、有田異人館や坂ノ下遺跡、天狗谷窯跡、原明窯跡などの史跡探訪に行きました。2

人も有田町出身ですが、行ったことがない史跡や、知らなかった事柄も多かったようで、今後、どのような職業に就くにしても、郷土の誇りをもって将来の道を進んでいって欲しいと思います。



注記の作業中。
陶片の断面に小筆で出土遺跡名等を記す。

町屋の模型作り教室開催

第18回の町屋の模型作り教室を、平成30年8月20日、21日の2日間にわたって開催しました。ここ数年は会場を有田町役場東出張所の2階をお借りして行っていましたが、今年は平成30年3月に竣工した、有田小学校新校舎のランチルームにて開催しました。

制作する模型は、有田内山伝統的建造物群保存地区内に実際にある建物をそのまま、もしくは一部を簡略化し、縮小したものです。まずは『有田内山伝統的建造物群保存地区』とはどういったものか、ということの説明するため、近

くの有田異人館まで歩き実物を見て、説明を聞いてから、模型の制作にかかりました。昨年は有田異人館の50分の1スケールの模型を作成しましたが、今年は約200分の1スケールの模型を何個も作って町並みを作ってもらいました。新校舎に初めて入った人も多く、汚さないよう注意しながらも、自分だけのオリジナルの町並みが完成しました。

今回の参加者は下記の通りです。

中村	莉子さん	(有田小学校5年)
瀬戸口	權くん	(有田小学校6年)
副島	星菜さん	(有田小学校6年)
檜山	愛実さん	(有田小学校6年)
佐藤	咲彩さん	(有田中部小学校5年)
岩永	彩萌さん	(有田中部小学校6年)
藤	まほろさん	(有田中部小学校6年)
川久保	有華さん	(大山小学校5年)
川久保	光莉さん	(大山小学校5年)
桑原	愛さん	(大山小学校5年)
梅崎	衣愛さん	(大山小学校6年)
副島	拓朗くん	(大山小学校6年)
二月田	ひなたさん	(大山小学校6年)





唐船城築城800年記念事業 唐船城復元イラスト制作始動

唐船城築城800年記念事業に伴って、現在様々な事業が開始されています。特に昨年度末に記念講演会として奈良大学千田嘉博教授にご講演いただきました。その際、復元イラスト作成のご助言をいただき、千田先生推薦の復元画家で富永商太氏をご紹介いただきました。そして、8月9日・10日の2日間で有田町へ富永氏にお越しいただき、唐船城復元イラスト作成のため、唐船城の視察をしていただきました。事前に千田先生からの情報もあり、様々な視点から観察されていました。今回のイラストについても、千田先生監修のもと、イラスト化されるということで、実行委員会事務局及び委員の方々も完成品のイラストがどのようになるか期待をしています。

制作したイラスト画については、11月のイベントでお披露目予定です。また今後、唐船城内の説明看板やガイドマップ、イベント等でご覧になることができる予定ですので楽しみに。



富永氏と唐船城視察中



真夏の唐船城（南から）



「明治有田偉人博覧会」 資料館・美術館企画展の お知らせ

前号でもご案内していましたが、今年は明治維新150年ということで、有田町でも幕末明治期の「人」や「志」に学び、今に生かし、未来に引き継ぐ事業が計画されています。

その事業の一環として、有田陶磁美術館では幕末明治期に西洋に輸出されたカップ&ソーサーを中心に当時の国内外でもてなしを再現する企画展と、有田町歴史民俗資料館東館では、幕末明治期に有田焼が世界に飛躍するきっかけとなった万国博覧会を紹介する企画展を下記のとおり開催します。

●有田陶磁美術館企画展

「お茶を召ませ！」

～幕末明治のカップ&ソーサー展～

会 期： 平成30年10月17日(水)

～平成30年11月25日(日) ※月曜休館

開館時間：9:00～16:30

入館料： 無料

会 場： 有田町大樽 有田陶磁美術館

主 催： 有田町明治維新150年事業実行委員会
有田陶磁美術館

※企画展展示替えのための期間として10月1日(月)～16日(火)まで臨時休館とします。

●有田町歴史民俗資料館企画展

「万博に賭けた夢～有田人の万国博覧会」

会 期： 平成30年10月27日(土)

～11月25日(日) ※会期中無休

開館時間：9:00～16:30

入館料： 無料

会 場： 有田町泉山 有田町歴史民俗資料館東館

主 催： 有田町明治維新150年事業実行委員会
有田町歴史民俗資料館

※尚、内装工事期間及び企画展準備期間として9月8日(土)～10月26日(金)まで臨時休館とします。

季 刊 『皿 山』

通巻 119号 (平成30年9月1日)

編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1

☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185

URL：<http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>